

稚内大谷高等学校1年生(男子16人, 女子13人, 計29人)

構想に対する評価

この模擬授業が、同時に構想全体を示すプレゼンテーションという要素も含んでいるとはいえ、さすがに、高校1年生に対して、年間指導計画の構想について評価してもらうというわけにはいかないので、1時間きりの授業ではあるが、「この後はどのような授業をやるのか」という、今後の学習プランを説明したうえで、生徒には、率直に1時間の授業を受けた感想を書いてもらった。似たような感想が多かったので、以下に、主な意見を抜粋する。

- パソコンであんなことができるのは驚きだった。
- ビデオを使ったことで授業の内容がわかりやすかった。
- 映像についていろいろわかった。
- 自分も映像制作をしてみたいと思った。
- 楽しかった。これからの授業もこんな感じだったらいいと思った。
- 普段の情報の授業と違ったので面白かった。
- 1時間の授業だったけど、とても楽しい授業だった。

「わかりやすかった」、「面白かった」とだけ書く生徒もいたが、「自分も映像を作ってみたくなった」と書いていた生徒が圧倒的に多かった。決して「面白い」ということだけがすべてではないが、「つまらなかった」というような感想がなかったことは素直に評価してよいであろう。私が考える本時の狙いは、「映像制作は楽しいから皆でやろう」というものではなく、生徒から「情報」の授業に対する興味を引き出したところで、その後の活動の中で、少しずつ情報とは何かに迫ることが狙いなので、第1回目の授業で、これだけ授業に対する関心が高められたという点では、誰でもわかりやすい「映像」を題材にすることは、大変効果のあることだと感じた。

他に、情報の授業でやってみたいこととしては、CGやポスター制作、インターネット、ホームページ制作などがあった。

授業後、稚内大谷高等学校の校長先生からも、改めて、最近では教員たちの間で「教科『情報』不要論」がささやかれ始めているという話を聞いた。「ゆとり教

育」の実施により、授業時間が削減されるという現状では、特に進学校にとっては、受験科目ではない教科「情報」はあまり必要性が感じられず、単なる「負担」とみなされつつあるとのことである。確かに、現在の教科書に並べられている内容をそのままぞったような情報の授業であれば、確かに、必要ないといわれても仕方がないかもしれない。

しかし、「情報を教える」という構想の中に「核」となるものを持って、私が示したような教育内容と目標を掲げ、授業を展開していけば、生徒にとっても、より実り豊かな内容になるのではないだろうか。

また、私がこれまで述べてきたような「映像制作」を通して、情報の性質について理解し、自分たちで情報を発信していく活動は、「情報の勉強＝コンピュータ教育」すなわち、情報化社会に必要な新しい技術を学ぶという程度の認識ではなく、学校の領域を越えた地域との関わりや、自分たちの街の魅力の再発見、マスメディアに対するメディア・アクセスなどにつながるものである。そして何よりも、情報教育の根幹に「映像制作」を位置づけることにより、人間がメディアを構成していくプロセスの中で、独自のジャーナリズムの視点をもった洞察力を育むことができるのだ。

それは必ずや、これまでメディア社会に取り残されてきた一般市民が、モラルを持ったうえで、主体的に情報を発信し、自由に多種多様な表現をすることができる社会を創造するための足がかりを築くことにつながっていくであろう。

妹尾制作のそのほかの主な作品

「こころのリセット」 昨日の恋に破れ、明日の希望を求めて、気がつけば日本の北の果てに来てしまった……。第2回 NHK ふるさとCM 大賞ユニーク賞受賞。



こころのリセット

「サハリンの見えるまち」子どもの頃、海の向こう側に見える異国の地に、神秘的な憧れを抱いていた。～近くて遠いサハリン～日露友好活性化を、この街で学ぶロシア人留学生の立場から訴えたCM。第3回NHKふるさとCM大賞最終審査会出場。



サハリンの見えるまち

「最・北の街から」男はまた恋を失い、北の街から京の都へ……そして流れ流れて生きていく。「TABI-BITO」に続く失恋旅情ドラマ第2弾。



最・北の街から

受賞歴——第2回NHKふるさとCM大賞ユニーク賞（2年連続最終審査会出場）／第4回北海道映像メディアコンクール入選／光映堂シーエーブイ賞／北海道テレビ放送局長賞／第12回ふるさとビデオ大賞（星の降る里 芦別賞受賞）第5回北海道映像メディアコンクール奨励賞／学習研究社賞 ほか。

----- 注 -----

- (1) 高村泰雄編著『物理教授法の研究』北海道大学図書刊行会，1987年。
- (2) 早稲田大学国際情報通信研究センター「嘉手納町デジタル映像制作・WEB配信プロジェクト」。

第3章

札幌の市民メディア活動

Yoshimura Takuya

吉村卓也

北海道東海大学国際文化学部教授
NPO 法人 シビックメディア 代表理事

はじめに

市民による「メディア的」な活動が全国的に盛んであるらしい。

その理由の1つとして、間違いなくインターネット、特に電子メールとWWW（ワールドワイドウェブ）が人口へ膾炙^{かいつ}したことがあろう。

筆者の関わっている札幌の「シビックメディア」の活動もまさに、このような電子的ツールが可能にした活動の一例といってよい。

シビックメディアは、02年の夏に市民によるジャーナリズム活動の推進を目的に設立された団体である。会員は現在約40名と規模的にはこぢんまりとしているが、現在、主な活動として、札幌市の3つのウェブサイトを作成したり、地域の学校とメディアリテラシーのプロジェクトを行ったり、市民向けの講座を行ったりしながら、取材して情報発信ができる市民をできるだけ多く育てていこうとしている。

なぜ、プロのジャーナリストではなくて、市民が取材することに意義があるのか。札幌における私たちの活動を紹介しながら、市民が作るメディアと、市民のジャーナリズム活動について考えてみたい。

サイトを編む

シビックメディアは、以下の3つのサイトを作成している。これらのサイトの編集は活動の大きな核となっている。まず、札幌の地域サイトで、主に札幌に住んでいる人たち向けの「ウェブシティさっぽろ」(web.city.sapporo.jp)、観光のためのサイトで、主に道外から札幌に来る人を対象とした「ようこそさっぽろ」(welcome.city.sapporo.jp)、それから、週1回、地元のコミュニティFM局と協力して行っている生放送番組の内容を伝える「そら色ステーション」(media.city.sapporo.jp/sorairo/)である。

この中で、「そら色ステーション」は、当初、住民によるメディアへの「パブリックアクセス」を意識して作られたコンテンツであった。すなわち、住民がメディアへアクセスし意見を表明する権利を何らかの形で保障しようという意気込み

English | サイトマップ | 市役所ホームページ | よこそさっぽろ(観光ガイド) | そら色ステーション(コミュニティFM実験事業)

Web シティさっぽろ <small>City Sapporo</small>		キーワード検索 <input type="text"/> <input type="button" value="検索"/> 使い方
11月17日(木)先降 10.29現在 気温3.6℃ 積雪深0cm 09:00現在 湿度61% 日の出06:29 日の入16:10 詳細 1977年(昭52)の今日、円山動物園に猿人猿館オープン		
▶ 特集:2007世界ノルディック ▶ モエレ沼公園グランドオープン ▶ 札幌市コールセンター 011-222-4834 8:00~21:00年中無休 よくある質問を検索 念のため、 ▶ 今週の当番医 ▶ 医療機関・夜間診療 ▶ 災害のまえに ▶ 日暮セブマ・ハチ・カラス ▶ 子どものこと (託児、相談、遊び) ▶ 札幌で働く ▶ 公営住宅募集いろいろ ▶ ごみとサイクル ▶ フリーマーケット情報 ▶ ごみ分別辞典 ▶ 消費生活相談 ▶ 市内・近郊のイベント ▶ 住民票、戸籍、など ▶ 五十音索引 *▶ もっと札幌市役所 ▶ よこそ市長室へ ▶ 市役所ホームページ ▶ 市政に提案 ▶ 市議会ホームページ ▶ 各区役所:中央・北・東・白石・厚別・豊平・清田・南・西・手稲 ▶ 申請書・届出書ダウンロードサービス ▶ 市民便利帳 ■札幌市役所代表電話番号 電話 011-211-2111 ▶ 市の機構と電話番号 シリーズ ▶ 札幌の景観色70色 ▶ 朗読 ▶ 美しい都心をつくる ▶ PMFの思い出 今の時計台(ライブカメラ)  *▶ 地のポイントも見る	札幌市のあらし バス・地下鉄・JR 札幌情報 演劇情報 メールマガジン スーパーリンク イベントカレンダー 札幌アート・シーン さっぽろ文庫 ▼ 最近掲載した記事 (内は掲載日) ▶ 雪まつりを盛り上げよう (11/16) サッポロさららんの雪まつり参加企画案を募集、11月30日まで ▶ リンゴで締めくくろう (11/14) まだ食べられます、おいしい札幌のリンゴ ▶ 消費生活相談 (11/11) 悪質商法(架空請求など)にご注意ください ▶ 子どものインフルエンザワクチン (11/9) 1回目のワクチンは、11月中頃までに ▶ 風呂敷を見直そう (11/4) DESIGN FUROSHIKI EXHIBITION(デザインふるしき展)、風呂敷のデザインと新しい使い方を募集 ▶ 11月、札幌をアートの月にしたい (10/28) 11月1日~30日、「さっぽろアートステージ2005」 ▶▶ もっと見る(これまでの記事)    ▶ 札幌の旬の食べ物をご紹介します ▶ おぼろづき 道産のおいしいお米 ▶ イクラ しょうゆ漬けにする楽しみ ▶ 今週の中央卸売市場の入荷見通し(11月14日更新) タラ、稚丹方面から入荷しています	空の森ジャンプ競技場に雪撮影、18日、中央区 M.S.さん クリックすると大きな写真をご覧いただけます  シリーズ:札幌の景観色70色  11月14日、「水雨」を追加 クリックすると札幌の景観色70色(6)をご覧いただけます ▶ トップページの写真を募集します *▶ トップ写真バックナンバー
さっぽろの横顔 札幌に住む、私たちの隣人のみなさんです  旭山森と人の会 代表 菅川昌人さん 旭山は森の入口。森と人、人と人をつないでいきたい。 「今朝もクマガラの声を聞きましたよ。最近、旭山にも降りてきているみたいです」、と旭山森と人の会代表、菅川昌人さんへのインタビューはいきなり鳥の話からはじまりました。 *▶「さっぽろの横顔」バックナンバー		
ウェブシティさっぽろは市民情報センターより発信しています ▶ 市民情報センター ▶ そら色ひろば 市民コンテンツ開発の場 ▶ さっぽろ日市民塾 ご意見・お問い合わせ メールマガジンの配信申込・申込解除 リンクはご自由に このサイトについて 著作権 プラウザ 動画を見るためには 運営主体:ウェブシティさっぽろ運営委員会		

「ウェブシティさっぽろ」のホームページより

があり、何か載せたいものがあればこの場所を提供するという意図があった。しかし、昨今の急速なネット文化の普及により、発信したいものがあれば自らホームページを開設して発信することが当たり前の時代になってきた。わざわざインターネットで「パブリックアクセス」を、公的サイトが保証するような時代はとうに終わったといつてよかろう。このような経緯から、現在はそのコンセプトを大幅に見直し、前述のようなコミュニティFMとの連携による番組を中心としたものに変化したのである。

これらのサイトは、札幌市の掲げる市民との「協働」というコンセプトのもと、市の情報発信事業の1つという位置づけとなっている。いまどきの自治体ではウェブサイトを持たな方が珍しくらいだが、普通、行政のウェブサイトといえ、役所が仕様を作って業者に依頼するか、ページ作成の知識のある職員がこつこつとボランティア的に作っているのが一般的であろう。

札幌の上記の3つのサイトについていえば、制作を担っているのは市民である。札幌に住む者が、自分たちが住む街を、自分たちの手で伝えようという思いが編集の根底にある。

私たちの行っている活動の目的は、メディアを作ることが究極の目的ではなく、メディアの制作を通じて地域を考え、変革することが目的である。コンテンツ制作はあくまでも、地域を住みよく、暮らしやすくするための手段である。コンテンツを編み上げる過程で、自分の住む地域を再発見し、問題意識を持ち、自治の意識が芽生える市民が増えることをいちばんの目標としたいと考えている。

市民が作れるメディア

私たちは自分たちの街のことをどれほど知っているだろう。地域の歴史や、土地の風習や食べ物のことをどれだけ理解しているだろう。地方の時代といわれて久しいが、果たして地域性は顕著になっているのだろうか。

北海道という、日本では特異な気候や風土にありながら、札幌の町は急速に東京に似たようなものになり、他の日本の大都市と何ら変わらないものになりつつある

ような気がしてならない。

札幌のメディアで報じられることは、東京発のものが圧倒的に多い。テレビでは、地元局が制作した番組は2割に満たないだろう。札幌にケーブルテレビはあるが、ローカルチャンネルはない。人口約180万人を抱えるこの都市は、地域で番組を作るには大きな都会であり過ぎるのかもしれないが、CNNやFOX、ディズニーチャンネルはあってハリウッドの最新情報はふんだんに手に入るのに、自分たちの地域の情報がそこにないのもどかしく感じる。

メディアは何を伝えているだろう。

こんな例がある。札幌駅は2003年3月、高層ビルになった。大規模なデパートが開店し、買い物便利になり、ブランド商品が買いやすくなったとメディアはこぞって報じた。2002年にワールドカップが札幌で開かれた時は、どこを見てもサッカーのニュースばかり。普段も地域の話題といえば、ショッピングやグルメ情報がテレビに氾濫する。テレビや新聞のニュースは北朝鮮やイラクで持ちきりだ。私たちの普通の朝は明日もやって来るのに、である。

このようなメディア状況に対する何とも形容し難い閉塞感、不満、いらだち、もどかしさがある一定のレベルにまで達した時、市民によるメディア活動が必然的に発生するのが、今日の社会なのではないだろうか。

メディアに対する不満は昔からあったろう。だが、「もういい加減にせい」と思いながら、そんなメディアに付き合わざるを得なかった昔とは、今は状況が決定的に違っている。なぜそうなったかといえば、冒頭に述べたインターネットの普及によるところが大であると思う。私たちの活動も、インターネットのワールド・ワイド・ウェブという手段がなかったら、かなり違った形になっていたと思われるし、そもそもメディアを手段として使い、地域を変えようなどという考えには至らなかったのではないかと思う。

ふがいないメディアがあれば、「自分たちでやるからいいよ」と一般人が言える時代である。無論、プロのメディアでしかできないことは多くある。事件報道、政治の話題、プロスポーツ、といった分野は市民が担うには無理がある。だがこれからは、プロフェッショナルとアマチュアのメディア上での役割分担が加速されるの

ではなかろうか。

「伝えたい」と思う心

とはいっても、普通の市民が、不特定多数の人に見られるに足るコンテンツを作るのはそれほど簡単ではない。

第三者に物事を正確に伝えるという責任を伴う作業に自らが関わることで、それを行う市民自体が変わっていく過程がある。つまり、最初のうちは、何かを言いたい、伝えたい、ビデオを作りたい、といった軽い気持ちで情報発信を考えている人たちが実は多い。コンピューターができれば、それで何とかかなと思っっている人たちも少なからずいる。

確かに何か作品らしきものはできるが、言ってみれば、趣味の延長とその発表会のような範疇を出ない。それはそれで内輪では楽しいかもしれないが、公に向けて発信することを考えた場合は限界がある。

市民がジャーナリスト的な意識に芽生えるには、いくつかの類型があるように思える。

まず、サークル活動的の情報発信をやっているうちに、「何か違う」と感じる人が必ず何人か出てくる。趣味の延長では満足できなくなってくる。自分の発信する情報が、受け手にとってどんな意味を持つのかを考え始める。公に発信するという責任の重みを感じ始める。できれば、社会的に意味のある情報を発信しようと思いつく。そのような人たちは、「市民ジャーナリスト」（まずは便宜的にこう呼んでおく）になる可能性を秘めている。

もう1つは、自身が積極的に何らかの社会的な活動を行っている人たちである。PTA活動でも、子育てでも、食を考える活動でも、森を守る活動でも何でもいい。このような人たちが、発信する意思を持った時、これもまた市民ジャーナリストとなり得る。それぞれの得意とするフィールドを持っているので、専門記者に近いような活動ができるだろう。そんな人たちは、これまでは自分が取材を受ける立場であったような人が多い。それが多くの場合、その分野に関して素人である記者の

フィルターを通すことなく、発信ができるようになった。そんな人たちがうまくコミュニケーションの方法を体得した場合のパワーは大きいといえよう。

「市民ジャーナリスト」とは

さて、「市民ジャーナリスト」とは何だろう。それはジャーナリストを生業とする人たちとは何が違うのだろうか。

シビックメディアの活動を始める時に、このことについていろいろと議論をした。まず話し合ったのは、よくメディアでいわれるような「客観報道」に逃げ込むのはよそう、ということだった。私たちはこの土地に住み、子どもを育て、仕事をし、暮らしている。札幌という共同体の一員である。ある事象を観察し、伝えるだけで当事者にならないというプロのジャーナリストがよしとすることを市民が倣うのは、生活者としては正しくないのではないか、ということだ。

問題があると思ったら、伝えると共に積極的に自らがアクションに加わったり、活動の主体となることを躊躇しない。これは議論が分かれるところかもしれないが、コミュニティの一員であり、一般市民の生活感覚を持ちながら発信を続けることを市民のジャーナリズム活動の根幹としてこれからも大事にしたいと考えている。

また、取材を端緒として様々な人と知り合えるのも、活動の楽しみの1つである。知り合った人同士を紹介したり、取材した人を市民ジャーナリズム活動に誘ったりと、地域にいる人と人をつなぐことも積極的に行っている。コンテンツを作って載せるだけのメディアでなく、人や物事をつないだり、またとなく行政と市民の対立というステレオタイプを認めず、両者の「メディエーター（仲介者）」の役も積極的に担っていきたいと考えている。行政職員も市民なのだから。

似たような試みに、アメリカで発祥した「パブリックジャーナリズム」と呼ばれるものがある。メディアが積極的にコミュニティに関わり、提言なども行うものであるが、これの中心となっているのはローカル紙などを中心とした既存のメディアであるところが私たちの活動とは少し違っているといえよう。

一般市民の活動であるとはいえ、公に情報を発信する際にはそれなりに責任を伴

う。それが札幌市の顔ともいえるサイトであれば、個人サイトとはまったく違った重みを持つものとなる。

プロのメディアにあるような、ゲートキーパー（門番）がいるわけではない。制作した記事、写真、動画は、何のチェックも受けずにサイトに公開するわけではない。何人かのメンバーが複数で事前に読んだり見たりする。いってみれば合議制のようなものであろうか。

活動のメンバーが参加するメーリングリストがあり、記事ができ、レイアウトが整うと、それは本番のサイトにアップされる前に、メンバーだけが見ることができるテストサイトにアップされる。レイアウトは基本的なページの雛型に従ったごくごくシンプルなものであるが、どの写真を使うか、どんなリンクを作るか、などは取材者の意思が尊重される。テストサイトにアップされている間、メンバーは自由にこの記事を見て、意見を表明することができる。すべてのメンバーは、記事について物申す権利を持っている。特に意見がなければ記事はそのまま本番サイトに移されるが、意見があればそこで議論が始まる。執筆者が書き直したり、追加取材を行ったり、また、合意に至らず没となる場合もある。こんなプロセスを通すから、記事が公表されるまでには時間のかかることもある。しかし、速報に重きを置くわけではないので、このような合意形成のプロセスを大切にしたいと考えているし、今のところ、この方法はうまく機能している。

プロの手によらない情報発信を考えた場合、1つの方向性として、自由参加の掲示板的なコンテンツが考えられる。このような形態はいかにもウェブらしく、それなりのダイナミズムもあるのだが、1つ間違えば無法地帯となる危険性をはらんでいる。身のある議論をするためには、きちんとしたファシリテーターも必要となるだろう。それにはかなりの労力と調整能力も必要とされる。

札幌市でも以前、電子会議室が開かれていたこともあったが、その健全な維持にはかなりのパワーを必要とした。現在のサイトのポリシーとして、自由参加のコンテンツは意見の投稿程度に留め、人の手による編集が加わったものを発表する方法を取っているが、将来的には誰でもが議論に参加できるような場を何らかの形で復活させることは必要だと考えている。

取材を通じた活動

なぜメディアを作ることが地域作りにつながっていくのか、という最初の話題に戻ろう。メディアに発表するためのコンテンツを作ることは、地域をより深く知るための最善の方法なのではないかと思う。それは、単なる勉強会といったようなものではなく、第三者に発表され、間違えれば批判を受けることを前提とした内容の制作であるところが重要である。

趣味の書き物とは違い、責任も発生する。自ら情報を発信する楽しさもわかるが、その怖さを実感する時もあるだろう。そのような責任ある状況に自らを追い込むことが、取材の深みを増す。つまり、ある事象について調べることを半ば強要されるのである。不正確なことは伝えられないので、徹底的に調べたり、しつこく話を聞くことで、これまで知らなかった地域のことが見えてくる。私はこんな土地に住んでいたのか、と改めて思うことも多い。

誇りに思うこともあれば、がっかりすることもある。だが、市民の活動の一貫として、なるべく土地に対する愛着や誇りを醸成することに活動の中心を置きたいと思っている。楽しくなければこのような活動も長続きはしない。

いくつか例を紹介しよう。

(1) 定山溪温泉を再認識

観光のサイト「ようこそさっぽろ」で、定山溪温泉を紹介しようということになった。この温泉は札幌市南区の定山溪という溪谷にあり、知名度の高い温泉地だ。「札幌の奥座敷」とも呼ばれる。

案が出た時、メンバーからは「えーっ」という声もあがった。それは、この温泉が、大規模ホテルが立ち並ぶ、俗化してしまった情緒のない温泉地のようになぜか思われていたからである。メンバーには「あんなところわざわざ紹介しなくても」という思いがあったに違いない。

とはいっても、観光資源としてこの大温泉地は外せない、とにかく調べてみよう、ということになった。さて、結論からいえば、取材を進めるに従って、以前に抱いていた「あんなところ」というイメージは見事に吹っ飛び、「こんな素晴らしい温

泉が札幌にあってよかった！」と、取材者の認識は一変した。

取材の過程で、その湯量の豊富さやお湯のよさ、歴史の中で定山溪が果たした役割、今も頑固に湯を守る宿の主人、家族で安心してくつろげる温泉リゾート、そんなことが人の話を聞いたり、調べ物をしていく過程でどんどん明らかになっていった。このようなきっかけがなかったら、定山溪温泉に対する偏見を抱いたままの札幌の住民であったのかと思うと恥ずかしい。この温泉地をどうやったらもっと盛り立てることができるだろう、とメンバーは自分のことのように考えるようになっていったのである[「定山溪でゆっくりと温まる」(ようこそさっぽろ) http://www.welcome.city.sapporo.jp/feature/04_01/spa_index1.html]

(2)「キタノカオリ」でパンを作る

最近の活動の例として、北海道産の小麦「キタノカオリ」の取材をきっかけに始まった、道産小麦粉を使ったパン作りに関する一連の動きを紹介したい。

これまで道産の小麦粉としてはハルユタカという種類があった。これは春まきで雨の多くなる7月に収穫期を迎えるため、雨の影響で穂発芽するなどで収量が安定しなかった。北海道の小麦粉としていちばん一般的なホクシンは秋まきで主にうどん粉に使われる。雨の多い季節の前に刈り取ることができ収量は安定するのだが、この小麦は余っている。

キタノカオリは、独立行政法人北海道農業研究センターが長いあいだ開発を続けてきた秋まきの強力粉用だ。これが広まれば、ほとんど外国産小麦粉に頼っているパンを、北海道の小麦で作ることができるのではないかと、市民ジャーナリストは考えた。道産小麦粉を使ったパンの可能性を、北海道の製粉業者、小麦農家が知ること、パン用小麦粉として、この新しい小麦が北海道の資産になるのではないかと考えたのである。

キタノカオリを製粉している地元の製粉会社から粉を譲り受け、市内にあるパン屋数件を回り、この新しい小麦粉を使ったパンを試作してもらった。これが商品化されるかどうかはまだ未知数であるが、2005年2月にはキタノカオリと道産小麦に関するパネルディスカッションと、この小麦粉を使ったパンの試食会を市内のホテルで開催した。市民ジャーナリストが傍観者に留まらず、自らムーブメントを作り

出した例である。

地域に対する愛

シビックメディアがスタートして約1年後、活動に参加しているメンバーに、アンケート調査を行ったことがある。既成のメディアと市民が作るメディアはどこが違うと思うか、という問いに対して、「地域に対する愛」と答えた解答がとても多かった。ちょっと気恥ずかしくなるような言葉ではあるが、裏を返せば既成のメディアには地域に対する愛がない、という批判とも取れる。

地域愛は、ともすれば偏狭な地域主義（リージョナリズム）となる恐れもないではないが、そもそも健全なナショナリズムやリージョナリズムは、その地に根付くメディアには欠くべからざるものではないだろうか。

私たちの活動は、札幌という地域にこだわり続ける。生活者としてこの街を味わい尽くし、問題点があれば解決する努力をし、よいところは臆するところなく徹底的に自慢する。そんな発信を続けていきたいと考えている。

参考文献

吉村卓也「ウェブ上で動き出す、地域市民ジャーナリズム」、水越伸ほか編集『NHK スペシャル変革の世紀Ⅱ インターネット時代を生きる』日本放送出版協会、2003年、221-30ページ。

第4章

市民が作るテレビ番組
「NPO 法人むさしのみたか市民テレビ局」
5年間の試行錯誤

Kawai Shinsuke

川井信良

NPO 法人むさしのみたか市民テレビ局 代表理事

私たち NPO 法人むさしのみたか市民テレビ局（以下市民テレビ局）は、東京の武蔵野市三鷹市がエリアのケーブルテレビで放送する番組を制作している市民グループである。テレビ局という名称だが放送事業者ではなく、市民による番組制作グループである。現在局員は69人、男女ちょうど半々で大学生から70歳代までの市民が参加しているが、主に定年退職組や子育て終了組のシルバー世代と、子育て最中のお母さん組が中心となって活動している。開局から5年、誕生から今日までの試行錯誤ぶりを紹介する。

地元ケーブルテレビのお誘い

きっかけは1998年の秋、地元ケーブルテレビ会社の武蔵野三鷹ケーブルテレビ株式会社（以下愛称のパークシティー）の放送制作部長島野浩二さんの「コミュニティチャンネル番組の一部を市民に作らせたいと思っているけど、どう思う？」という電話だった。

いったいそれはどういうことなのかわからなかったが、何となく面白そうな話だなというのが第一印象だった。

結局この提案は、パークシティー主導で進められ「コミュニティチャンネル委員会」という検討委員会なるものが作られ、両市の商工業団体の役員やコミュニティセンターのリーダー、文化団体の役員、行政の担当者など10人が委員として集められた。

第1回委員会は99年2月に開催され、その後2回3回と委員会が開かれたが、テレビ番組を作るということがどういうことなのか、まったくイメージが湧かないためか進展が見られず、「1度作ってみようか」ということになり、武蔵野チームと三鷹チームに委員が分かれて1本ずつ制作することになった。

私が参加した三鷹チームは、ある定年退職者が太宰治の足跡を案内するボランティアガイドになって“地域デビュー”を果たした番組を作ることになった。しかしビデオ番組制作は全員素人。見よう見まねで作り始めたが遅々として進まず、5月にスタートしたものの結局最後はパークシティーの力を借りて完成が10月までか

かってしまった。

しかしながらその番組で、ガイドとして“地域デビュー”した男性が「いやー楽しいです」と本当に嬉しそうな表情をビデオの中に見た時、映像の持つ伝える力に改めて驚いた。「まちづくり」が人を知ることが基本だとすれば、人の表情をこのように伝えることができるテレビの力はすごい、「テレビを使っているいろいろ発信できたら面白い」と思わせたのだった。

そんな印象を他の委員も同様に感じて、「よし、市民が発信するテレビ番組をつくろう」ということになり、委員会は解散して、「市民テレビ局開局準備室」を2000年1月に開設することになった。

趣意書を作る、対等にと協定書も交わす

さてこの頃になると、市民に番組を作らせてみたいというパークシティーの魂胆も薄々感づいて、やってみたいけど下請けにされるのも勘弁だなあと思うようになってきた。参考のためパークシティーの考えが一昨年文書で知らされたので紹介する。「市民ならではの視点からの企画と、そこから生まれる番組を取り込むことにより、地域コミュニティチャンネルの内容の充実を図る。また、それが、ひいては番組制作費の軽減につながり、さらには地域への浸透度を高めることにより加入営業にもつながるといふ、一石二鳥も三鳥をも狙おうというのが、『本音』の基本的な考えである。」と、想像していた通りで実に正直である。しかしこのように市民に番組を作らせてみようという姿勢は、CATV放送事業者として勇気のいることだったと思う。

このような先駆的なお誘いととも魂胆も感じ取っていた準備室のメンバーは、パートナーシップ協定という覚書を取り交わす提案をパークシティー側にするに決めた。その主旨は、お互いに支援と協力をベースにした対等な関係を確認することであった。この提案は受け入れられ、00年3月に協定書を取り交わすことになった。特に冒頭で「1. 武蔵野三鷹ケーブルテレビ株式会社は、地域の一員として、地域に有益な放送・通信サービスを提供するために、むさしのみたか市民テレビ局

を支援します。2. むさしのみたか市民テレビ局は、武蔵野三鷹ケーブルテレビ株式会社の提供するサービスを活用し、地域住民が、まちを知り人を知り、市民となる活動を行っていくことで、パークシティーが市民メディアとして定着することを支援します。」と謳^{うた}っている。放送事業者と市民が協働して「市民メディア」を育てることに合意した、全国でもほとんど前例を聞かない画期的な調印でもあった。

趣意書も同時に次のように作成された。「むさしのみたか市民テレビ局は地元のケーブルテレビパークシティーのコミュニティーチャンネルをお借りして、武蔵野・三鷹で暮らす私たちがつくり育てる市民のためのテレビ局です。さまざまな出来事、さまざまな生き方、さまざまな考え方を伝えあう中で、人を知り、まちを知り、新しいつながりや理解が、生まれ育ち広がっていく、そんないきいきとしたまちづくりを実践し、また支援するため、市民による市民のためのテレビ局として設立します。」

約100人の素人集団でスタート

さていよいよ局員募集。日刊紙の地方版や市の広報紙が取り上げてくれたおかげか、200人近い問い合わせがあり、結局100人超が説明会に出席してそのほとんどの方が局員として登録してくれた。

この参加者の顔ぶれに驚いた。いわゆる地域活動に参加している市民の顔ぶれは金太郎飴的なことが多いのだが、ほとんど全員が会ったこともない知らない人であった。男女がほぼ半々、年齢も様々、こんなに幅を持った新鮮な多数の人々を地域デビューさせてしまうテレビの魅力を改めて教えられたようであった。

00年7月7日の開局記念パーティーも150人を集めて楽しく終わり、やっと番組作りがスタートした。しかしメンバーといえば、まったくの素人集団といってもよい状態で、わずかに会社の記録用ビデオ制作に携わった人、録音技師、地方局の元アナウンサーが数人いただけであった、予想されたこととはいえ、試行錯誤を楽しみながらやるしかないと覚悟を決めた。登録された約100人のメンバーを6つのチームに分けて、チームごとに番組を作ることにした。各チームともテーマも手法